

Aug. 2013

# ZENBI

全国美術館会議機関誌

---

August 2013 [Vol.4]

## ごあいさつ 建畠 哲 ● 1

## ブロック報告

〔北海道〕寒くても、遠くても 井内佳津恵 ● 2

〔東北〕震災を機に考える 岡部信幸 ● 4

〔関東〕前衛回顧と資料展示 地域性の視点から 水沼啓和 ● 6

〔東京〕季節の変わり目 橋本善八 ● 8

〔北信越〕冬の美術館 藤田裕彦 ● 10

〔東海〕コレクションによる展覧会 30周年記念展など 村田眞宏 ● 12

〔近畿〕関西の美術館の連携について 出原 均 ● 14

〔中国〕「らしさ」の現在 椋木賢治 ● 16

〔四国〕ふたつの祭り―地域とアート 神内有理 ● 18

〔九州〕まねのできない気合いと気概 野中 明 ● 20

## 新規会員館紹介

小杉放菴記念日光美術館 ● 22

アーツ前橋 ● 23

馬の博物館 ● 24

実践女子学園香雪記念資料館 ● 25

軽井沢ニューアートミュージアム ● 26

山ノ内町立志賀高原ロマン美術館 ● 27

高浜市やきものの里かわら美術館 ● 28

文化フォーラム春日井 ● 29

ヤマザキマザック美術館 ● 30

九州国立博物館 ● 31

## 事務局から 32

## 編集後記 33

## ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 33

## 6年間を振り返って 青柳 正規 F-01

## 全美フォーラム

01 静岡県立美術館の評価 10年を振り返って 泰井 良 F-03

02 日本の美術文献の発信と伝達―国立美術館のartlibraries.net参画の意味を思う 水谷長志 F-06

03 所蔵作品情報のデジタル化と発信 情報・資料研究部会の20年間の活動から見える課題と展望 鴨木年泰 F-09

04 戦後美術のダイアグラム A New Avant-Garde Tokyo 1955-1970展によせて 光田由里 F-13

ISSN 2186-7259

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.4 2013年8月1日発行 ©全国美術館会議

〔編集〕全国美術館会議機関誌部会 編集幹事 尾崎信一郎 松山利光

〔発行者〕全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

〔デザイン〕宮谷一孝（株式会社エヌ・シー・ビー）〔印刷〕日本写真印刷株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

## ごあいさつ

全国美術館会議が発足して、今年で 61 年になります。当初は館長たちが年に一度集う親睦会的な性格のものであったと聞いていますが、加入館数の増大と活動の幅の拡大、経済的、社会的な状況の変化などに伴って、館を取り巻く現実的な課題を話し合い、共同して解決をはかるという、より実践的な組織へと徐々に移行してきました。一昨年に制定された美術作品の国家補償制度の実現への働きかけや東日本大震災で被災した館蔵資料のレスキュー活動、チャリティー・オークションへの取り組みは、今日の全国美術館会議に求められている新たな役割を象徴するものであったといえるでしょう。

こうした課題にリーダーシップを発揮してこられた青柳正規前会長は本誌の創刊号に「(全美は) わが国も美術館はどうあるべきかという将来構想を練り、その構想を広く社会に訴えると同時に実現への努力をすることが重要である。全美は『提案と主張』の組織に変わりつつあるのである」と記しておられます。周知のように、バブル経済崩壊後の美術館は厳しい財政難を余儀なくされておりますが、ただ座して経済の好転を待つのではなく、冬の時代を乗り越えるための社会や行政への主体的な働きかけが必要であるに違いありません。360 余館からなる全美には、まさに組織の力を生かして美術館の側からの「提案と主張」を積極的に推し進めていくことが期待されているのです。

そのためには各企画部会を中心とした活動を維持、発展させなければなりません、また制度的なテーマについての問題提起も重要であろうと思われます。たとえば指定管理者制度は制定以来 10 年になろうとしており、導入した館の実績についての調査や検証が総合的になされなければなりませんし、公立美術館の独立行政法人化も喫緊の課題であるでしょう。そうした懸案に積極的に対応するためには、全美そのものの法人化も早晚、日程に上がってくるはずです。

もちろん会員館相互の人的な親睦を深めるという設立時の目的が、今後とも本会議のもっとも重要な意義であることに変わりはありません。青柳前会長の行動力には及ぶべくもありませんが、皆様と手を携えて会の発展に微力を尽くすつもりでおります。よろしくお願い申し上げます。

全国美術館会議会長 建畠 哲（たてはた あきら・埼玉県近代美術館）

## 寒くても、遠くても

井内佳津恵（うち かつえ・北海道立文学館／前北海道立旭川美術館）



### 凍らぬうちに、改修工事

近年、北海道内の美術館・博物館の改修工事に伴う一定期間の休館が続いている。前号で菅訓章・神田日勝記念美術館長から北海道立近代美術館、札幌芸術の森美術館、岩内町立木田金次郎美術館の改修に伴う休館が報告されたが、それぞれ、すでに休館を終えてリニューアルオープンを果たしている。並行して、さらに四つの館が、それぞれに異なる理由で、改修工事休館にすでに入ったり、入ろうとしている（いずれも終了の時期は予定）。

- 旭川市彫刻美術館（1994年開館、建物は1902年竣工の重要文化財）：耐震工事のため、2012年2月1日～3年程度
- 北海道立旭川美術館（1982年開館）：空調設備の改修、2013年9月9日～11月15日
- 北海道開拓記念館（1971年開館）：消火設備、バリアフリーの充実、常設展示場の改修、2013年11月4日～2015年春
- 北海道立文学館（1995年開館）：暖房設備改修のため、2013年12月15日～2014年1月31日
- 札幌市彫刻美術館（1981年開館）：冷暖房機器の更新、2013年11月18日～2014年1月17日

ミュージアムを運営しながら、並行して施設の経年変化や老朽化に目を配り、計画的に改修を策定していくことは、決して容易なことではない。予算の縮減、施設管理部門の職員の異動、指定管理者

の変更等により、長期的な計画がうまく引き継がれずに、齟齬をきたす可能性もある。また、北海道のなかでも、特に旭川美術館の空調機改修工事では、凍結が起きる気象状況となる前に工事を終えなければならないという制約のもと、北海道におけるアートのハイシーズンである夏までに大型展を終えたのち、根雪のシーズンまでに工事を終えるという高難度な設定である。北海道でも指折りの寒冷地であることに由来する難しさである。

一時的には、サービスの低下ととらえられがちな改修休館ではあるが、長い目で見れば、間違いなく、ミュージアムのより良い活用につながっていく。そのことを利用者の方々に理解いただくためには、改修工事によって、どこがどんなふうによりよくなったのか、そうした情報提供の労を惜しまないことが、大切ではないかと考える。

### 遠距離連携のお誘い

ところで、北海道のミュージアムが、全国巡回展の企画について関心を示すとき、必ずと言っていいほど聞かれる言葉がある。「北海道は輸送費がかさむので、北海道内であと1館か2館、探していただけないですか。」確かに、北海道内には、道立美術館、芸術館だけで6館、市町村立の美術館の活動も活発であり、北海道内で2、3館の巡回が可能になれば、リーズナブルになるというのは理解できる。実際、道立美術館同士で自主企画を共催したり（2012年「芹沢銈介展」＝函館美術館、

旭川美術館、同年「棟方志功展」＝帯広美術館、函館美術館）、北海道立近代美術館のエコール・ド・パリコレクションを巡回（2011年、帯広美術館、旭川美術館）、剣淵町絵本の館コレクション展を巡回（2011年、釧路市立美術館、旭川美術館）、というような試みは行っているものの、館の方針も、予算規模もそれぞれに異なる中、都合よく道内でパートナーが見つかるケースばかりでは決してない。

その意味では、今年4月、旭川美術館で立ち上がった「やなせたかしと『詩とメルヘン』のなかまたち」展は、旭川、岐阜（6～8月）、高知（8～10月）という三つの都市の美術館が、「やりたい内容」で一致を見、企画会社を通さずに、三館合同で企画して、日本縦断巡回させるユニークな試みである。内容としては、高知県香美市のやなせたかし記念館が所蔵する、『詩とメルヘン』時代のやなせたかしの作品（同誌に連載された「熱血メルヘン怪傑アンパンマン」の原画を含む）を核に、『詩とメルヘン』に参加していた宇野亜喜良、司修、林静一、佐々木マキら14名のイラストレーターの原画をあわせて、70年代に青春時代を過ごした大人から、現在アンパンマンが大好きな幼児まで、幅広い世代に楽しんでいただける内容とした。

当初は、旭川と香美市の2館で企画の検討を始めたため、輸送費をどのように抑えていくかが難問だったが、幸いなことにちょうど中間地点ぐらいい

たる岐阜県美術館が手を挙げてくれたことが、大きな力となった。公立館3館で分担しながら一つの展覧会を実施していくというのは、何をどのように分担するかという点に最も困難が生じるのだが、これも、岐阜県美術館が地元マスコミと実行委員会を組んでくれたため、柔軟な分担が可能となったのは、大変ありがたいことであった。

巡回企画を買う際、「企画はいいけれども高い」「分担金はリーズナブルだが内容が薄い」というジレンマは、全国共通の悩みではないだろうか。また、苦勞して自主企画展を開催しても、費用は高く、自館だけでは観覧者数もさほど伸びず、全国的な発信もできない、という苦い経験は、決して筆者一人のものではないと考える。同時に、やなせたかし記念館のように、魅力あふれるコレクションを持ちながら、首都圏からは遠く、スタッフの数も少なく、これまで全国展開の機会を得られなかったというミュージアムも多いのではないだろうか。

自主企画によって内容を充実させ、都道府県内外を問わず、連携して共通経費を圧縮する。そのためには、普段からの情報交換、関心の共有が何よりもたいせつであり、本機関誌に文章を書かせていただく機会を活用して、皆さんに呼びかけさせていただきたい。

「遠くても、工夫次第でリーズナブルにできます。いっしょに手づくりしませんか？」



「やなせたかしと『詩とメルヘン』のなかまたち」展  
旭川美術館展示風景



岐阜県美術館での関連事業「やなせうざぎ」「うながっぱ」との写真撮影会の様子

## 震災を機に考える

岡部信幸（おかべのぶゆき・山形美術館）



東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から2年が経過した。福島・宮城などからの山形県内への避難者は4月1日現在でも約9,500名を数えている。震災による山形県内の博物館施設や収蔵作品、来館者、職員に直接的被害は及ばなかった。県内の博物館活動は震災以前と変わらないように見受けられるが、館を取り巻く状況は震災以後、加速して厳しさを増している。それは地域の美術館のあるべき像を逆照射しているようでもある。ここでは近隣のトピックについてランダムに綴ってみたい。

せんだいメディアテークで開催された「志賀理江子 螺旋海岸」（2012年11月7日～2013年1月14日）は、数多くのメディアで取り上げられ話題となった。2008年に名取市北釜に移り住んだ志賀理江子が震災前後に制作した200点を超す写真は、そのすべてのイメージが3.11に収斂していくように会場で構成され、空間に身を置く者の記憶や言葉そして身体性をも誘発し、写真というメディアの可能性を感じさせた。同館は震災後に「考えるテーブル」という場を設け、地域社会や表現活動を考えるトークイベントや活動報告会のほか「てつがくカフェ」を開催。また昨年5月に開設した「3がつ11にちをわすれないためにセンター（わすれん!）」では、市民が震災後の復旧・復興の過程をさまざまなメディア（映像、写真、音声、テキスト）で記録した情報を、アーカイブ化して公

開している。震災直後の状況に即応する館の特性を踏まえた活動とそこで機能するメディアの特質があらわれているように思える。

近県の主な展覧会や話題を列記すると、東日本大震災復興支援、文化庁・ミュージアム活性化支援事業として、仙台市博物館からスタートした「若沖が来てくれましたープライスコレクション 江戸絵画の美と生命ー」は、岩手県立美術館（5月18日～7月15日）と福島県立美術館（7月27日～9月23日）に巡回する。また昨年末に東京藝術大学大学美術館で開催された「尊厳の芸術展—The Art of Gaman」は、福島市（こむこむ館）で開催後、仙台（せんだいメディアテーク、5月15日～18日）、沖縄（浦添市美術館、6月1日～30日）、広島（広島県立美術館、7月20日～9月1日）で開催される。

いわき市立美術館では「実験工房展—戦後芸術を切り拓く」が神奈川県立近代美術館から巡回（4月20日～6月2日 富山県立近代美術館、北九州市立美術館分館、世田谷美術館に巡回）。昨年開館20年を迎えた郡山市立美術館では、「生誕110年 小磯良平の世界」（4月20日～6月16日）、「震災復興支援 愛知県美術館収蔵品展」を開催（8月31日～10月20日）。今年開館15年を迎える諸橋近代美術館では、川崎市岡本太郎美術館所蔵による「岡本太郎展」（4月20日～6月30日）。宮城県美術館では、「ゴッホ展 空白のパリ時代を追う」が京都市美術館から巡回する（5

月26日～7月15日）。4月3日にはリアス・アーク美術館が全館オープンし、震災直後から学芸員が取材した写真資料と被災資料による「東日本大震災の記録と津波の災害史」が常設展示に新しく加えられた。さらに秋田市中心部の千秋公園に隣接する再開発エリア「なかいち」に昨年暫定オープンした新秋田県立美術館が、1967年開館した秋田県立美術館（平野政吉美術館）が有する藤田嗣治作品を移設展示し、秋田の文化創造と共生を掲げ、9月28日に正式オープンする。秋田ではアートによる地域の活性化を謳う「あきたアートプロジェクト」が進行中で、その一環として秋田出身の鴻池朋子が企画する「東北を開く神話」が開催されている。今冬の第2章『第二の道具～指人形』（秋田県立美術館、1月19日～2月3日）では、「呪文」に基づき、秋田在住のアーティストが作った指人形と、縄文時代の土偶や石棒（第二の道具）とが併置された。

地域の歴史・民俗・宗教・美術など、場所の特

性に働きかけ、自らの表現を試みる鴻池の試みは、山形の「東北画は可能か？」にも通じる。このプロジェクトは、東北芸術工科大学で教鞭をとる三瀬夏之介と鴻崎正武が企画運営するチュートリアル活動として2009年に開始された。「絵画」に「東北」という地域名を冠することで、画材やジャンルや制度を超え、さらに地域における美術の成り立ちを、制作者のみならず享受者が自らの奥底に還って考察することを可能にするプラットフォームといえる。

時間を超えてあるべき芸術、その経験が日常生活のそれへと変質し、さらに日常が想像を超えた非日常（カタストロフィ）に晒された現在であっても、地域の時間軸を遡行しつつモノをインターフェイスとして未来へ投射する美術館の試み（ミッション）は、震災以後においても有効であるはずだ。展覧会や、地域における人やモノや事柄との関係性とプロセスとに重点を置くアートプロジェクトを、歴史へ帰する持続にしていきたいと自省している。



「東北画は可能か？」 昔語り＋朗読＋ライブ  
「もののけ語り」&「東北画 meets 遠藤ミチロウ」  
（2012年11月18日、喜多方蔵の里 旧外島家住宅）  
写真提供：「東北画は可能か？」



## 前衛回顧と資料展示 地域性の視点から

水沼啓和（みずぬま ひろかず・千葉市美術館）



本誌が創刊されて以来、東北ブロックを中心に、震災についての様々な取り組みが報告されてきた。水戸芸術館の「3・11とアーティスト：進行形の記録」（2012年10月13日～12月9日）と茨城県近代美術館の「二年後。自然と芸術、そしてレクイエム」（2月5日～3月20日）も、震災を経験した館による、美術を通じた震災へのアプローチである。3.11から一定の時間を経ながら、人々のなかに未だ鮮明な記憶が残るこの時期に、水戸駅をはさんで近接する二つの美術館が、企画を競い合うかたちとなった。直接体験したか否かにかかわらず、美術館にとって震災は極めて重い課題であり、今後しばらくその話題が尽きることはないだろう。

関東ブロックの他の展覧会を概観すると、限られた予算のなかで苦闘する館が多いせいか、所蔵作品中心の展覧会や他館のコレクション展も多く見られる。これは今期に限ったことではないし、他ブロックでも事情は同じかもしれない。一方で、担当学芸員の研究成果が十全に反映された意欲的な展覧会も、少なからず目についた。なかでもひときわ印象に残ったのが、神奈川県立近代美術館（鎌倉）の「現代への扉 実験工房展 戦後美術を切り拓く」（1月12日～3月24日）である。美術家や音楽家が協働したグループの回顧にふさわしく、美術作品のみならず、舞台美術の写真資料、映像資料、イベントの案内状やポスター、書籍や雑誌、楽譜などの多彩な出品物が、展示ケースを多用しつつ陳列されていた。うらわ美術館で開かれた「日

本・オブジェ 1920-70年代 断章」（2012年11月17日～1月20日）も同じく見応えのある展覧会だった。小さなオブジェ類が並ぶ会場内には、書籍や雑誌、写真などの資料類も多く見られた。また昨年秋に開催された埼玉県立近代美術館の「日本の70年代 1968-1982」（2012年9月15日～11月11日）でも、膨大な量の雑誌や資料がケース展示されていた。以上のように昨年来の関東ブロックでは、資料系展示物を積極的に利用しつつ、新しいテーマに切り込んでいく充実した内容の企画が目についた。

このところ、1920年代から70年代頃の日本の前衛美術に対する再評価が以前にも増して盛んであり、今回紹介した三つの展覧会もすべてこの分野を扱っている。前衛系作家の作品は、現物が失われ、写真記録しか現存しないことも多く、彼らが試みたパフォーマンス系の作品や舞台芸術とのコラボレーションなども、必然的に写真や映像のかたちでの展示になる。また60年代を中心に、美術家が自ら文章を執筆し、書籍・雑誌の表紙やポスターをデザインし、印刷媒体を使った新しい作品形態を模索する試みも広くおこなわれたが、これらも資料類に準じた方法で展示されることが多い。一般に前衛系の作家は社会との関係を強く意識し、他分野との協働を志向する。そのためこの分野の展覧会では、より広い文化史的な視点から、作品に限定されない多角的な展示が行われる機会が多くなるのかもしれない。

一方で関東ブロックという地域性をフィルターにこの現象を見た場合、別な側面が浮かび上がってくる。

私の勤務する千葉市美術館は、東京まで電車で1時間くらいの場所にある。東京から多くの来館者が訪れる一方、千葉市民も休日には東京に出かけ、上野で開かれるような大規模展を見る。このようななか、東京の大規模館よりも少ない予算で、同じような展覧会の廉価版を行ったところで、話題にもならなければ、集客も期待できない。広く薄く客層を求めるような企画は、当館ではあまり良い結果を残していない。東京に隣接する地域には、程度の差こそあれ当館と同じような状況におかれている館が多いのではないだろうか。けれども昨今の厳しい経済状況のなか、限られた予算内で、他ではやらないような个性的かつ内容のある企画を行うことは容易ではない。この地域の館にとって、これまであまり取り上げられてこなかったテーマを選び、資料系展示物を駆使しつつ多角的に見せるやり方は、このような課題に対処する有力な選択肢となりうるのではな

いだろうか。大きな動員数は望めないかもしれないが、比較的少ない予算で、話題性のある展覧会を作り出せる余地は充分にある。今回紹介したような展覧会が関東ブロック（あるいは東京の中規模館）で近年増加している理由のひとつとして、以上のような地域的側面も無視できないと思われる。

もちろんこのような傾向に対しては、賛否両論あるかもしれない。資料類を多用する展示は、その分野の予備知識がない来館者には馴染みにくく、ある程度客層を限定してしまうからだ。具体名は伏せるが、上記で紹介した展覧会のひとつが巡回する地方美術館の学芸員と雑談しているとき、次のようなつぶやきが聞かれた。「思った以上に資料類が多い。地元の人たちにどのように見せていくか考えないといけない。」確かに地方美術館の実情を考慮すれば、このような懸念も理解出来る。しかしながら東京ブロックに隣接し、近隣にも競合館が併存する関東ブロックの美術館にとって、ときには狭く深く客層を絞ることも、ひとつの戦略になりうるのではないだろうか。



「現代への扉 実験工房展 戦後美術を切り拓く」展示風景  
神奈川県立近代美術館（鎌倉）

## 季節の変わり目

橋本善八（はしもと よしや・世田谷美術館）



日本で公立の美術館が誕生したのは、1951年。あらためて説明するまでもなく、それは神奈川県立近代美術館の開設に遡る。私の勤務する世田谷美術館は1986年の開館なので、人間でいえば、まだ20歳代の青年(?)である。いずれにしても、現在から神奈川県立近代美術館の開館年を引き算すると、公立美術館の歴史は60年を僅かに越えただけに過ぎない。

現在、日本各地に設置されている「美術館」という名のつく施設は、400館を超えているようだ。設置者、運営母体、使命や目的、館の規模はさまざまだし、地域によってバラつきもあるが、施設の数からみれば、美術館は身近な存在になったともいえる。しかし、私は、こうしてあまねく美術館が設置されることを、ただ手放しで喜びたいと思っているわけではない。なぜか。そんなことは当然のことと叱責されそうだが、美術館の「実質」は、美術館の建築自体ではなく、個々の美術館の所蔵品であり、また展覧会や教育普及といった事業自体にあるからだ。こうした「実質」が、ごく普通に社会生活を営む人たちのあいだに、どのように相互的親和性を育んできたのか、さらに今後、築くべき関係とは何かについて、私たちはいかなる文脈を編んでいくべきかと、ふと考える。

日本の経済状況には安心も安定もなく、生産年齢人口の減少が進み、よりいっそう、各館の事業に充てられる予算は減少していくことになるだろう。さらに、建て替えや改修を必要とする美術館が増え、設置

者の経済的負担が増大することは必至だ。こうした悪天候が予想されるなかで、美術館が社会のなかでどのような道を拓くべきなのかを、よくよく考えなくてはならない季節の変わり目を迎えている。

世田谷美術館では、「企業と美術」というテーマを掲げ、2006年、「福原信三と美術と資生堂展」を開催した。その第二弾として、「暮らしと美術と高島屋—世田美が、百貨店のフタを開けてみた。—」(4月20日～6月23日)という風変わりな展覧会を開催した。創業180年を超える百貨店・高島屋が明治以降から継続してきた美術家との交流、またデザイン、建装、建築、出版事業、そして呉服の先端を拓こうとする試みなどを要素として展覧会を構成した。いずれも、日本人の生活文化の推移と密接に関係するものであり、いわゆる「美術」という枠組みだけではとらえきれない種々の周縁事項を自ずと意識することになった。高島屋史料館(大阪市)には、高島屋の企業活動のなかで蓄積されてきた膨大な文化的資源が収蔵されており、年間を通じて誰もが無料で観覧できる環境を整備している。これは企業による社会貢献活動の一つとみることができる。本展に出品した作品、資料の大多数は、この史料館から借用した。昨今、企業の内部留保という言葉を聞く機会が多いが、高島屋史料館に蓄積されてきた作品と諸資料は、高島屋の好意的な文化的資源の内部留保との印象を得た。保存と展示は、ある場面で矛盾をかかえるが、各美術館の収蔵品もまた、どこか似たところがあるといつてよいだろうか。

町田市立国際版画美術館での「空想建築—ピラネージから野又穫へ—展」(4月13日～6月16日)は、自館の収蔵品も相当量活用され、加えて足利市立美術館、東京オペラシティ アートギャラリーへの寄託作品などが一定量まとめて組み込まれて構成されていた。例えば、ジョヴァンニ・パッツィスタ・ピラネージの古代ローマをモチーフとした作品と、コイズミアヤ(1971年生まれ)、また野又穫(1955年生まれ)の作品などが展覧会の部分を成し、空想建築というテーマのもとに展開する空間は、タイムマシーンに乗せられたような戸惑いの時間を生み出していた。また、府中市美術館の「近代絵画にみる夢—河野保雄コレクションの全貌展」(5月25日～6月30日、巡回)は、百点美術館を開くに至ったコレクター・河野保雄氏からの寄贈作品を存分に堪能できるものだった。同館の志賀秀孝氏はカタログで「美術館は、鉄筋とコンクリートではなく、そのコレクションを血肉として生まれるものである」と記しており、府中市美術館の血肉＝「実質」を、強く感じさせてくれる説得力があった。加えて、河野氏が福島県立美術館に寄託されている作品群も展示されており、一般社会と美術館のあいだに生じる親和性の一断面を見る思いがした。静嘉堂文庫美術館が、動物をモチーフ、あるいは意匠の一部とする作品を選び出し構成した「せいかどう動物園—いきものをめぐるイマジネーション—展」(5月25日～7月15日)にも心惹かれた。「ふだんは静嘉堂のお蔵に眠る動物たちが目を覚まし、展示室に大

集合します」というたい文句の通り、まさに楽しき賑わいの場だ。制作年代、技法や材質は多岐にわたり、内容は動物園を超越し、昆虫や魚、人や河童までが網羅され、ふだんは展示の機会に恵まれない作品が、きっとこのテーマによって数多く顔をのぞかせていたのだろう。私は同館のコレクションの重厚さに驚いたが、驚いたといえば、東京国立近代美術館の開館60周年記念展「美術にぶるっ!」(2012年10月16日～2013年1月14日)だ。そのネーミングにも虚を衝かれたが、同館の長年にわたる美術館活動の成果が端的に示された内容だった。これらの事例は、楽しいばかり、凄いばかりの話ではなく、収蔵品にまつわる調査研究の積み重ねの成果なのだと受け取れる。収蔵品を熟知するという土台を成すことによって、興味深い企画が展開でき得るのだという好例だ。

昨今、予算的な厳しさから、企画展の開催が危うくなるという現実に対応していると、じつに切ない「負けそう」感がつのる。これは、美術館職員の多くが実体験していることだろう。もちろん、都市部では周辺人口に鑑み、マスコミとのタイアップにより資本が動くが、市町村立美術館のほとんどは、それらのことが期待できないのが現実だ。「負けそう」感を払拭し、上を向いて歩くためには、各館が抱える事情に添いつつ打開策を探るわけだが、時代の景色を鳥瞰しつつ、美術館の「実質」とは何だろうかと自戒をこめて思いを巡らせるうちに、2013年も半ばを過ぎた。



「暮らしと美術と高島屋—世田美が、百貨店のフタを開けてみた。—展」ポスター(世田谷美術館)



「近代洋画にみる夢—河野保雄コレクションの全貌展」会場風景(府中市美術館にて)



## 冬の美術館

藤田裕彦（ふじた ひろひこ・新潟県立近代美術館）



新潟では11月に入ると冷たい雨が多くなり、空一面は鉛色になる。やがて12月の半ばを過ぎると雨は雪に変わる。当館は新潟県のほぼ中央に位置する長岡市にあり、毎年、大雪に見舞われるが、ここ数年は新潟市内の降雪量も多くなった。もともと新潟市は日本海に近く風も強い地域だが、雪のせいで上越新幹線以外の交通機関は軒並み乱れはじめる。富山県や石川県、山形県に向かう電車も運休となり、高速道路も区間によって通行止めや速度規制となる。そのため朝の交通情報を確認するのは必須だ。これは日本海側に位置している富山県、石川県、福井県、そして多数のスキー場を有する長野県も、程度の差はあれ同様の悩みがあるだろう。要は冬は人は動かないし動けない季節なのである。少なくない美術館が、展覧会予算や作品購入等について、いわゆる「冬の時代」を迎えている今日、北信越ブロックの美術館は、さらに物理的な意味で、冬の季節をどう過ごすかに精一杯頭を使うことになる。とは言え、もともと雪国の人間は我慢強いと言われている。だからという訳でもないだろうが、冬の美術館は大きく分けて三つのやり方で乗り切っていた。

一つ目は冬期に休館することである。今までも長野県の私立美術館はこの季節は敢えて休館しているが、今年は長野県信濃美術館も1月28日から3月7日までメンテナンスのために休館している。当館も2月4日から3月11日まで休館し、開館以来初めての冷温水空調設備のオーバーホールを行

なった。これで安心してルーベンス展をはじめとした開館20周年記念展を迎えられるというもの。学芸員もこの時期、普段できない亀倉雄策資料の整理や作品調査を継続して行うことができた。

二つ目はコレクションを中心とした企画展の実施である。多額の予算をかけた展覧会をこの時期に行うのは勿体ない。せっかくなら人が動き始める春からにしたい。そんな中、所蔵作品をきちんと調査してその成果をじっくり見てもらう。あるいは新たなテーマを設定して、所蔵作品を異なる角度で紹介する場として活用するというわけである。どちらかと言えば、こんな季節でも美術館を訪れてくれる友の会会員や美術ファン向けの展覧会で、人の少ない張りつめた静かな環境で、作品と対峙できる貴重な機会となるため意外と好評である。美術館にとっても所蔵作品調査と来館者満足に繋がる良い機会となる。「ひと・からだ・みぶり アートに見る身体」(富山県立近代美術館)、「所蔵品展におけるテーマ展

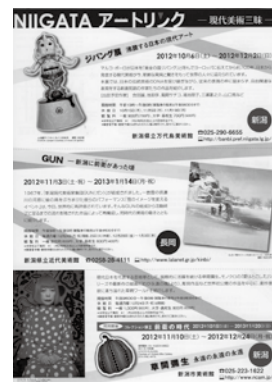
近代日本画の名品」(福井県立美術館)、「収蔵作品にみる彫刻 - 立体造形の足し算」(佐州市立近代美術館)、「館蔵作品コレクション展」(松本市美術館)などがあり、3月からは新潟県立万代島美術館も同様の「ひとの姿 / 人のかたち」を開催している。

三つ目は季節に関係なく興味のある方は必ず来てくれる展覧会を行うというもの。基本的には自主企画で、その館でなければ見られない企画展が対象となるため、必然的に当該地域出身か、ゆかりの作家や作品を扱った主題となる。これらの企画

展は、春以降に開催した場合と比べても入館者数はそれほど変わらない上、派手さはなくとも地道な調査が反映された丁寧な展覧会になることが多い。金沢出身の洋画家を回顧した「村田省三 - 画業60年の歩み」(石川県立美術館)、「新潟ゆかりの作家たち展 - 長井亮之・富川潤一・江川蒼竹」(新潟市美術館)、その地域の学校や公共施設が所蔵する絵画を集めた「秋葉区の隠れた名品展 岩田正巳小品展」(新潟市新津美術館)などがその例であるが、富山県水墨美術館の夏のワークショップ作品を教育普及展の形で紹介した「あつまれ墨画アーティスト」も含まれるだろう。当館のことで恐縮だが、オーバーホールに入る直前まで開催していた「GUN - 新潟に前衛があった頃」もこれにあたり、1967年長岡市で結成された前衛美術家集団〈GUN〉を初めて大規模に回顧した展覧会で

あった。前述の理由に加えて、〈GUN〉を最も有名にした《雪のイメージを変えるイベント》(1970)が真冬の大雪中で行われたことから、大雪の時期がベストという理由もあった。とは言え、地方の現代美術を扱った展覧会である。入館者数はあてにはしていなかったが、大雪の中、美術作家や美術関係者など、日本全国から予想以上に訪れていたことにはたいへん感謝している。この背景には新潟市美術館の塩田純一館長の発案のもと、新潟市美術館、万代島美術館そして当館で、美術館同士の新たな協力体制の発足を目的とした「新潟アートリンク」の存在も大きいと言える。

その意味でも、新潟のそして北信越ブロックの冬の美術館は各館とも工夫に満ちていた。ただ、この冬を乗り切っても、もうひとつの「冬の時代」はまだまだ続きそうである。



新潟アートリンクチラシ



GUN 「雪のイメージを変えるイベント」1970年  
撮影：羽永光利

## コレクションによる展覧会 30 周年記念展など

村田真宏（むらた まさひろ・愛知県美術館）



昨年、秋以降の東海地方の展覧会ラインアップを見ると、静岡県立美術館の川谷承子氏が、「コレクション展に見る時代の気分」（『ZENBI』vol.2）と題して前々号で指摘された状況が続いている。一つは、開館の周年記念展としてコレクションを大規模に公開する展覧会がその後も複数の館で開催されていることである。昨年、開館 30 周年を迎えた岐阜県美術館では「リニューアルオープン記念 初公開作品を含む県美コレクションの精髓による三幕の物語」が約 4 ヶ月にわたり開催された。これは既に川谷氏が紹介されたものである。今年に入って、三重県立美術館が開館 30 周年を記念して「30 年ぶん 三重県立美術館 開館 30 周年 コレクションの全貌展」（1 月 4 日～3 月 24 日）を開催した。この展覧会は、江戸時代から、明治、大正などを経て現代までを七つの時代にわけ、それぞれに日本美術のみならず同時代の海外の作品も加えるかたちで構成されていた。それは何時にも増して、個々の作家や作品が内包する時代性が引き出されていて、馴染みのあるコレクションを改めて新鮮に受け止めることができた。例えばスペインバロック期の画家ムリーヨの作品と曾我蕭白の作品が近くに展示されているというような具合である。このような展示上の工夫が盛り込まれてはいるものの、全体から受ける印象はごくオーソドックスなもので、同館の 5,000 点を超えるコレクションの性格を誠実に示すものとなっていた。そして、この大規模なコレクション展には、30 年を超える収集活動の大きな成果と今後への課題を、自らだけにとどまらず県民や設

置者とも共有したいという美術館の思いが込められていたようにも感じられた。充実した同館のコレクションではあるが、このように改めてその全体像を俯瞰すると、そこに未だ欠落した作家や作品のあること、またそれを踏まえて今後に向けての収集のあり方を考える機会にもなったはずである。

刈谷市美術館でも相前後して「開館 30 周年記念コレクションの森展」（4 月 20 日～6 月 2 日）が全館の展示室を使って開催された。この美術館は、当初、市民のギャラリーとして開館したため、本格的に収集活動を開始してから約 20 年である。その間、どのような考え方に基いて収集活動を行ってきたかということとその成果を、30 周年という区切りの年にあらためて市民に報告し、館としての説明責任を果たすことが強く意識された展覧会であった。同館の収集は、まず地元縁のある作家や作品を核とし、そこに関係する作家を加えて広がりをもたせるかたちで、コレクションのなかに幾つものまとまりのある作品群を形成している。一例をあげれば、大正期に若い洋画家たちが集い、細密な描写を研究した愛美社の作家たちについて、学芸活動と結びついた実に丁寧な収集が続けられている。そこに愛美社の活動の契機となった岸田劉生の作品が加えられ、何故、美術館がその作品群を収蔵しているかが実にわかりやすく紹介されているといった具合である。それに加えて、企画展の開催を機会として、そこで取りあげた作家の作品を収蔵するということで、コレクションにもう一つの特色と魅力を加えていることも、展示構成のうえでも、活動の歴史を振り

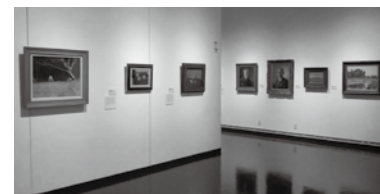
返る関連資料などを含めて丁寧に説明がされていた。同館は近年でも一定の予算が確保され、継続的に作品購入ができる状況にある。そこで購入を核に据えながら、あわせて寄贈作品を選択的に受け入れることで、しかるべきコレクションを形成してきていることが今回の展示でもよく示されていた。そしてそれらは、購入費をもつことのできない公立美術館におけるコレクション形成が、いかに制約を受けるものかということを暗に示してもいた。近年、公立美術館では購入費が措置されないという事態が広がっている。結果として収集活動は寄贈という方法に頼らざるを得なくなっており、購入を基本とした戦略的な収集が困難になってしまっている。このような状況が長く続く、どうしてもコレクションに歪みが生じてくるのではないかと思う。美術館の活動を評価し、貴重な作品を寄贈していただくことそれ自体はきわめて意義のあることで、活動の大きな支えであり励みともなるもので、もとよりそれを否定するつもりはない。しかし、それだけではコレクションに埋め難い欠落部分が生じ、やがてそれが歪みとなり大きくなっていきかねない。その意味で、刈谷市美術館の展覧会は、地域に根ざした活動が求められる地方公立美術館の、コレクション形成の一つのあるべき姿を我々に示したものであった。

次に注目したいのがコレクションの重要な作家や作品をテーマとした展覧会で、まず静岡県立美術館で開催された「維新の洋画家 川村清雄」（2 月 9 日～3 月 27 日）が注目された。この展覧会は、県ゆかりの作家として川村の作品を収蔵してきた同館と、この画家の資料をまとめて収蔵する江戸東京博物

館との共同企画として開催されたもので、オルセー美術館から里帰りさせた晩年の代表作《建国》なども含めた大規模な回顧展であった。川村が明治初年にイタリアに留学して身につけたイタリア伝統の油彩画が、フランスに傾斜していた当時の日本画壇には受け入れられなかったこともあって、これまで美術史のなかであまり大きく扱われてこなかった。そのためこの作家の全貌に触れる機会は得がたいものであり、意義深い回顧展であった。また、愛知県美術館では、開館 20 周年記念として「クリムト《黄金の騎士》をめぐる物語」（12 月 21 日～2 月 11 日）を開催した。これは館のコレクションのなかで特に重要な作品を核とした企画展として、開館 20 周年を機にようやく実現させることのできたものであった。このように美術館が、周年を機にコレクションをまとめて公開したり、そのなかの重要な作家や作品に焦点をあてた展覧会を開催することは、館の活動として重要な意味をもっている。ネガティブに捉えれば、近年の予算削減のなかで、周年事業といっても特別な展覧会の開催などが困難なところまで追い込まれたことの反映であるともいえよう。多くの美術館は、開館後の活動のなかで自館の活動を方向付け、それに応じた組織や人員、事業環境を確保する間もないままに、そのような状況のなかに追い込まれてしまった。だからといってコレクションの公開やそれを軸とした展覧会の開催を、安易な選択といった皮相的な受け止め方をするのではなく、むしろ、地域社会における美術館のあり方を、自分たちのみならず市民や設置者とともに考える機会としてとらえるべきであろう。



「30 年ぶん 三重県立美術館 開館 30 周年 コレクションの全貌展」  
三重県立美術館



「開館 30 周年記念 コレクションの森展」  
刈谷市美術館



## 関西の美術館の連携について

出原 均（ではらひとし・兵庫県立美術館）



最初にお断りしておきたい。他のブロックに比して交通の便のよい近畿ブロックなので、その加盟館にはできるかぎり足を運ぼうとしたが、いくつかの館は果たせなかった。まして、次々と開催される企画展は、関心のあるものを見るだけで精一杯だった。限られた知見ながら目に付いたのは、この春開催された、コレクションに焦点を当てたいくつかの展覧会である。それらについて述べようと思う。

本誌2号で島敦彦氏が予告された国立国際美術館の「美の饗宴 関西コレクションズ」(4月6日～7月15日)は最初に挙げなければならないだろう。同館と大阪新美術館建設準備室、京都国立、滋賀県立、和歌山県立の近代美術館、兵庫県立美術館の6館のコレクションから選り抜かれた、主に前世紀の欧米美術の優品を集結させた展覧会である。確かに、こうした美術の「主流」を形作るまでに美術館がコレクションを充実させてきた、その蓄積に光を当てるのは意義あることに違いない。たとえその収集事業は現在に引き継がれていない館があっても、いや、だからこそというべきか。そこを十分認めた上で、しかし、私がここでその魅力を語りたいのは、なんらかの傾向や偏向、雑種性のあるコレクションというものの特性を活かした展覧会の方である。

企画の妙を見せたのは大和文華館の「花の美、石の美、庭園の美」(2月23日～3月31日)。特別展の位置付けとはいえ、同館のコレクションが大半を占める。愛石趣味を主題とし、明楽寺伝来の

中国の奇石を展示の起点に置いて、そこから他の奇石や奇石図、花鳥画、庭園画、山水画、さらには、陶芸や工芸品にまで世界を広げていた。その小さな宇宙から様々な方向に広がる、その広がり方は実に新鮮だった。滋賀県立近代美術館の「装いとしつらえの四季—志村ふくみの染織と日本画・工芸名品選—」(4月6日～6月30日)は、純然たるコレクション展の企画化。志村氏の染織群を四季に分け、それを水先案内にして、それぞれに日本画、工芸品を配分したものだが、洒落たまとめ方である。そういえば、伊丹市立美術館のコレクション展「コレクション ウラがもれる」(1月12日～3月3日)も、現代作家、今村源の寄託・寄贈・寄贈予定作を各所に配置することで、ある基調を作り出していた。

なお、いわゆる常設展で好感を抱いたのは、和歌山県立近代美術館。比較的オーソドックスな時系列の展示ながら、作品の配置に細かな配慮がなされ、キャプションそのものについての説明文を入口の壁に貼ったり、キャプションの作家名にはルビをふったりと、目の行き届いた会場である。美術館によっては、相変わらず解説文を難解な論文調としたり、背後からの照明で観客自身の影が作品に映り込んだりすることもある中、こうした細やかさは貴重だ。

今回、コレクション主体の展覧会を周年事業とする場合が多いことに気付いた。京都国立近代美術館の工芸コレクションを主にした「交差する表

現 工芸/デザイン/総合芸術」(3月16日～5月6日)は、開館50周年記念展。田辺市立美術館(本館・分館)の「渡瀬凌雲展」(4月13日～7月7日)も、分館の開館15周年記念展であり、分館のコレクションが大半である。逸翁美術館の「復活!不昧公大圓祭—逸翁が愛した大名茶人・松平不昧—」(4月6日～6月2日)は、小林逸翁が松平不昧の関係品を数多く収集したからこそこの展覧会で、彼の生誕140周年記念展。上述の滋賀県美の展覧会も来年が開館30周年にあたり、そのプレビュー展という。

コレクションと周年を結びつけるのは、館の独自性を強調する意味があるのだろうが、その冠の背後には厳しい美術館運営が伺えることもある。日本ではコレクションで多数の観客を呼べる館はわずかだが、コレクション中心の展覧会は低予算でできる。すでに本誌2号で川谷承子氏が、3号で山田諭氏が述べたように、昨今の厳しい経済情勢の中で、コレクションの活用が求められているのだ。そこから企画性を高め、場合によっては企画展として組み立てることになる。確かに、冠に恥じない企画力をいくつか実見した。また、様々なレベル

で行われる学芸的な創意工夫には注目してよいように思う。この種の展覧会には図録がない場合もあり、その活動がなかなか認知されにくい。しかし、各館が展覧会(コレクション展に限らず)の質を高める上で、こうしたソフト面を記録し、共有する機会を設ける必要性が早晚生じるかもしれない。

最後に、昨年11月3日に開館した兵庫県立美術館の分館、横尾忠則現代美術館に触れておきたい。この館のコレクションは、そのほとんどを横尾氏からの寄贈・寄託による。開館記念の第一弾「反反復反復」(11月3日～2月17日)は、借用品が多かったのに対し、第二弾「ワード・イン・アート〜字は絵のごとく 絵は字のごとく」(3月2日～6月30日)は館蔵品を主とする。横尾氏は言葉を他のモチーフ同様に自由に画面に配置するが、それらと全く同じというわけでもない。そうしたモチーフとしての言葉のあり方の面白さが発見できる展覧会だ。今回の「モチーフ」にはひねりがあるが、モチーフによる展覧会は通常パターン化されやすいのも確か。上で述べてきたことを踏まえるならば、今後、コレクションをどのような斬新な切り口で料理するかで、この館の真価が問われることになるだろう。



横尾忠則現代美術館  
「横尾忠則展 ワード・イン・アート〜字は絵のごとく 絵は字のごとく」会場風景

## 「らしさ」の現在

椋木賢治（むくのき けんじ・島根県立石見美術館）

2013年4月1日現在、全国美術館会議の会員館は357館にのぼっている。この数字を多いとみるか、少ないとみるかは基づく尺度に抛るとはいえ、単純に平均値をとれば、一都道府県あたり7館以上が設置されていることになる。この事実、決して空疎なものではない。少なくとも357の美術館一つ一つに設立の経緯があり、今に至る歴史がある。コレクションの特色、展示の方針、教育普及活動の取り組みなど、それぞれの美術館に固有の持ち味が、それぞれの歩みのなかで形作られている。この357館の集合体としての美術館とその活動は、今の日本において相当に大きな文化資源として映る。

では全体として大きな文化資源である日本の美術館は、その個別のあり方としても充足し得ているか。そこには勿論357通りの状況があり、事情があり、課題があるだろう。けれども多くの美術館が、予算の削減に困窮し、入館者数の多寡に気を配り、地域や学校との連携に腐心しつつ、活動を継続している状況は想像に難くない。それでも美術館は続いていく。美術館の生命は、作品を介した人と美との血の通ったふれあいにある。そうした状況のなかで、個々の美術館は、いかにして個々の美術館としての命脈を保っているか。共通する事情があり、個別の事情があるだろう。以下、2012年度下半期における中国地方の県立美術館の状況からその一端を探る。

鳥取県立博物館では「須田国太郎展 没後50

年に顧みる」(2012年10月20日～11月25日)が開催された。日本の近代洋画史に大きな足跡を残した須田国太郎(1891-1961)は、京都にアトリエを構えながらも、スケッチ旅行のため、頻繁に各地を訪ね歩いた。山陰地方へもたびたび来訪しており、地域ゆかりの重要作家の一人である。没後50年を記念した本展は、主要作品140点で構成された。同様に写生旅行や後進指導を通した縁故の地にある島根県立美術館でも開かれている(2月15日～4月1日)。

島根県立美術館では「生誕100年 松本竣介展」(2012年9月29日～11月11日)が開催された。昭和前期に活躍した洋画家・松本竣介(1912-48)は、少年時代を過ごした岩手にゆかりの作家として知られるが、妻・禎子の郷里である島根県松江市に墓所があり、また生前は何度か松江を訪れている。本展は生誕100年を記念し、代表的油彩画120点を含む回顧展である。

岡山県立美術館では「生誕100年 塩出英雄展」(2012年12月21日～2013年1月27日)が開かれた。塩出英雄(1912-2001)は、岡山県と境を接する広島県福山市出身。奥村土牛に師事し、院展を中心に活躍した。1963年以来、毎年行われる院展(岡山会場)の開催に大きな役割を果たす等、郷土の美術振興にも貢献している。院展出品作を含む、約100点が展示された。

広島県立美術館では「生誕100年 船田玉樹展 一異端にして正統、孤高の画人生」(1月21日

～2月20日)が開催された。船田玉樹(1912-91)は広島県呉市出身の日本画家。生涯にわたって探求した革新的な表現により、近年大いに注目を集めている。本展は生誕100年を記念し、230点の作品により画家の全貌に迫ろうとする意欲的な企画である。

山口県立美術館では「生誕100年 松田正平展 悠久の周防灘」(4月11日～5月26日)が開催された。地元山口県を拠点に制作を続けた洋画家・松田正平(1913-2004)の生誕100年を記念して、油彩画101点が展示された。

山口県立萩美術館・浦上記念館では「古萩—江戸の美意識—」(2012年10月20日～12月9日)が開催された。萩藩御用窯で製作された江戸時代の萩焼を「古萩」と捉えて紹介。茶の湯文化における美意識を包含する萩焼の本質に迫った。

島根県立石見美術館では「東京藝大美術館所蔵 日本近代美術の名品展—森鷗外と米原雲海を中心に—」(2012年10月6日～11月26日)を開催。ともに島根県出身で東京美術学校の教壇に立った森鷗外と米原雲海を軸に、藝大美術館コレ

クションを展観。鷗外生誕150年を記念した。

それぞれの美術館が、その所在する地域にゆかりの美術動向について、調査と研究そして顕彰を続けている。一見、あたりまえにすぎるこうした活動は、美術館とその所在する地域とが成長し、成熟していくための、血となり、肉となっていくことだろう。緩やかな変化は一見して認識しがたいが、継続することによって得られる果実は大きいものと確信する。地域に根ざした文化資源を重視することが、結果として、その美術館のアイデンティティを際立たせることとなる。多くの美術館に共通する事情と、個々の美術館に固有の事情とが、それぞれの館の現在の姿を織りなしている。こうした活動を継続した先に何が見えるのか、想像することが大切と思う。

そしてこれら展示事業に、周年企画が多いのは必然でもある。だからこそ「いま」「ここ」で行われる意義がどのように提示されるのか、その現在性の問われる企画のなかで、個々の美術館「らしさ」が競われている。着実な仕事が継続されていることを慶ぶばかりである。



「須田国太郎展 没後50年に顧みる」(島根県立美術館)



## ふたつの祭りー地域とアート

神内有理 (じんない ゆり・町立久万美術館)



昨年末から今年にかけ、四国地域で開催された展覧会のなかで、高知県立美術館の「大絵金展ー極彩の闇」(2012年10月28日～12月16日)は特筆すべき展覧会であった。土佐の絵師・金蔵の生誕200年を記念し、芝居絵屏風や絵馬・幟・白描など約200点にのぼる絵金とその弟子たちによる作品の展示、さらには地域に根づく「絵金文化」をも紹介しようとするものであった。

第1会場では、一般の美術展に見られる展示ーいわゆるホワイトキューブ空間のなか、作品のもつ属性が捨象されたーが行われた。作品そのものの性質をじっくりと鑑賞することが出来る反面、無機質な空間にさらされた絵金の屏風絵はアートと呼ぶには不似合いなチープさを感じさせた。高知県香南市赤岡町の絵金祭りで見た商家の軒先に、夜の暗がりの中で蝋燭に照らされたあやしげな作品の記憶とは隔たりがあったのである。

一方、第2会場では、祭礼時に使用する大掛かりな二つの絵馬台が組まれ、絵金作品のもつ「極彩の闇」を伝えようとする興味深い展示であった。芝居絵が組み込まれた絵馬台に、商店の名前が入れられた真新しい提灯がつり下げられる。それは、まさに地域の歴史と文化を今に生きるものとして体感させた。

加えて、近隣美術館との連携も興味深い。香美市立美術館では同時期に「絵金とその時代展ー闇からの伝承」展(2012年11月10日～12月16日)が開催された。絵金を活用した町おこしに取り組

んでいる赤岡町の絵金蔵では、近年発見された絵金の絵馬が初公開された。

学術研究においても、明治美術学会の後援によるシンポジウムが開かれ、さらには絵金作品について初の化学調査が行われるなどの進展がみられた。また、絵金の祭礼がおこなわれる県内11箇所の神社と美術館の展覧会情報が併記された『高知絵金ガイドブック2012』(高知県立美術館・絵金蔵編集)が発行されもした。祭礼としての絵金文化を、美術館と神社がともに盛り立て見せようとした意味で、いわば「大絵金祭り」の様相を呈した。

絵金作品は数年前、作品貸出先が行ったくん蒸作業の影響で、著しく変色する事故に見舞われた。その後、所蔵者は貸出に対して厳しい姿勢で臨んでおり、現在、高知県外で作品を公開することは難しいと聞く。生誕200年という記念すべき展覧会だったとはいえ、この点数におよぶ出品の実現は、同館による地道な調査と地元所蔵家との信頼関係があったからにはほからなない。

さらに、四国では美術による「祭り」がもうひとつあった。瀬戸内国際芸術祭2013である。「海と島々、そこに住んでいる人の素晴らしさをアートを通じて明らかに」(北川フラム「香川県情報誌 新・さぬき野」第40号、2013年春)することを目的とした、「世界でも例のない現代美術で過疎の地を再生しようというもの」(福武總一郎、前掲書)である。前回との違いは、来場者が瀬戸内海の四季を感じられるよう、春(3月20日～4月21日)夏(7月20日～9月

1日)秋(10月5日～11月4日)の3期になったこと、岡山県玉野市・宇野港と香川県西部の5島が新たに会場に加わったこと、参加アーティストが倍以上に増えたことなどが挙げられる。

「瀬戸内国際芸術祭」については、サイトスペシフィックな作品の質、地域経済への波及効果などの商業的側面、アートとコミュニティの関わりなど、さまざまなテーマで論じることができるだろう。そのなかで、地域とアートの関係、すなわち地域文化・資源を活用したアートイベントという視点から見てみたとき、瀬戸内国際芸術祭と高知県内での「大絵金祭り」とは対比できるように思う。前者は、アートを外部からの刺激として利用し、地域振興のための手段とする。後者は、地域文化に深く根差すことで、内部活性の力とした。

文化芸術振興基本法(2001年)の制定以降、アートを地域振興のための手段と考える方向が顕著にみられる。特に地方の美術館には、コミュニティと連携した地域振興機関としての役割が強く求めら

れているよう思われるが、この「地域振興」という言葉に潜む「地域の固有性」に対する単純な肯定の上にアートを手段として利用するならば、却ってアートがもつ豊かさを損ねてしてしまうようにも感じる。地域に根差した文化そのものを提示すると同時に、美術史に照らし合わせながら、その価値判断を行った「大絵金祭り」はことのほか重要であるように思われる。

このほか、2012年11月から2013年4月までの四国ブロックの展覧会を概観すると、教育普及的な工夫の見られる徳島県立近代美術館「きんぴアート発見学ーつくる&みることの交流展ー」(2月9日～3月24日)のほか、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の「石内都一絹の夢」(2012年10月7日～2013年1月6日)、高松市塩江美術館の「シンクロー風景の同時性ー南条嘉毅展」(2月9日～3月31日)、高松市美術館「小さな世界へようこそ!」(2月9日～3月24日)など、香川県内における現代美術の企画展が多くみられた。



「大絵金展」会場風景



「瀬戸内国際芸術祭2013」(小豆島/ヤノベケンジ)



## まねのできない気合いと気概

野中 明 (のなか あきら・長崎県美術館)

佐賀県の鳥栖 JCT を交点としながら十字を描くように九州の東西、南北を結ぶ高速道路。その気になれば、ここ長崎からも九州ブロックすべての県へ日帰り足で足を延ばせる。また、2011 年に全線開通した九州新幹線鹿児島ルートを使えば、博多・鹿児島間は片道わずか 1 時間 20 分程度。ちなみに空路を利用すると、長崎・沖縄間も日帰り旅行圏内だ。と言いつつも、西の端に位置する長崎から九州全体を見渡すのは簡単な事ではない。出島が置かれていたのも宜なるかな、地形的に隔離されたこの土地で暮らしていると、情報の面においても視野がだんだんと狭くなり、囲い込まれたような気分になってくるとするのが実感。このような次第で、十分に任を果たせるか甚だ心もとないが、ここ半年ほどの「九州ブロック」の状況を振り返ってみたい。

まずは別府現代芸術フェスティバル 2012「混浴温泉世界」(2012 年 10 月 6 日～12 月 2 日)。“別府八湯”にかけた“8 つ”のアートプロジェクトを中心に、各種パフォーマンスやレクチャーを織り交ぜながら成り立つこのプロジェクト。2009 年に続き今回で 2 回目の開催となる。地域振興、市街地活性化など、行政側の思惑、あるいは既存の NPO の活動等と上手くリンクしながら人口約 12 万人の地方都市とは思えない規模と質を備えたプロジェクトを実現させている企画者・NPO 法人 BEPPU PROJECT (代表理事：山出淳也氏) の力量と熱量には素直に頭が下がる。本プロジェク

トをはじめ、誰でも企画者として参加できる市民文化祭「ベップ・アート・マンス」といった期間限定の企画の他、同法人は市の商工会議所と連携しながら市街地の空き店舗をリノベートし活用する「platform」事業など恒常性を持つ事業も展開している。両者を縦糸・緯糸としながら別府の新たな環境を織り上げようとする同法人の姿勢には学ぶ点が多い。ちなみに、2006 年に博覧会が開催され、現在も長崎市を中心に続いているまち歩き観光「長崎さるく」(“さるく”とは長崎弁で“ぶらぶら歩く”の意)は「別府八湯温泉泊覧会・オンパク」、「別府八湯ウォーク」という別府の企画を下敷きにしているのです。別府、恐るべし。

恐るべしと言えば、福岡県立美術館と福岡市美術館の 2 館を会場として開催された「福岡現代美術クロニクル 1970-2000」(1 月 5 日～2 月 11 日)。両館の共同企画により実現した本展の内容の素晴らしさについてはカタログをご覧ください。まずは企画者の志と勇気(?)にエールを送りたい。九州派の次世代から現在につづく地元のアートシーンを編年的に整理し展覧会に仕立てるという試み。今後の議論に“叩き台”を提供するという意味においても大変意義深い企画であると分かってはいても、特に地元の関係者の尋常ならぬシビアな目に晒されること必至。私であれば尻込みしてしまうだろうと想像しながら展示室を後にした。一方で、地元のアートシーンをこのようなかたちで検証できる福岡という土地に対する羨望の念が

芽生えたのも事実。都市の規模とそれに伴う情報の絶対量の差は、そのまま都市の経験の差となる。1988 年に福岡市美術館で開催された「九州派展」もそうであるが、本展は福岡の街の規模があつてこそこの企画。この意味で、無い物ねだりをするのではなく、自らの環境において何が可能で何が意味を持つのかという事を真剣に見つめなおす機会を本展にはいただいた。

こちらは残念ながら足を運べなかったが、久留米の石橋美術館と有馬記念館で開催された「金閣・銀閣の寺宝展」(1 月 12 日～3 月 10 日)も 2 館同時開催。企画の内容と開催館の方向性や性格のマッチング如何によってはその必然性が問われる場合もあるだろうが、複数館によるひとつの展覧会の同時開催という形式は、各館の物理的条件による限界を超える規模の展覧会の実現を可能とする。この面において、今後とも各館積極的に検討するに値する形式であるように思う。

一方で、熊本市現代美術館では九州に拠点を

置き活躍する 40 歳以下の若手作家を各県 1 組ずつ選び紹介する「祝 CAMK10 周年!九州アート全員集合展」(2012 年 9 月 22 日～11 月 18 日)が開催された。こちらは言うてみれば 1 館で九州全域を覆ってしまおうという試み。「熊本市現代美術館記念展 vol.3 九州力 世界美術としての九州」(2003 年)、「ピクニックあるいは回遊」(2008 年)など、これまで九州出身、在住のアーティストの紹介を継続してきた同館の射程の広さと気概の大きさを前にわが身を振り返ると「・・・」である。

以上、不惑を超えてなお悪い続ける私に勇氣とヒントを与えてくれた事例の紹介をもって「九州ブロック」の報告とさせていただきます。

最後に、2012 年 12 月 14 日、九州、特に長崎、沖縄に縁の深い写真家・東松照明氏が惜しくも他界されたことをご報告したい。当館では追悼の意を込めて氏の作品約 120 点による「東松照明の写真」(4 月 7 日～5 月 12 日)を開催させていただいた。



「福岡現代美術クロニクル 1970-2000」展示風景 (福岡県立美術館)



「福岡現代美術クロニクル 1970-2000」展示風景 (福岡市美術館)

## 小杉放菴記念日光美術館

〒 321-1431 栃木県日光市山内 2388-3



TEL. 0288-50-1200  
FAX. 0288-50-1201  
E-mail: manager@khmoan.jp

〔開館時間〕  
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで  
(入館は午後 4 時 30 分まで)

〔休館日〕  
毎週月曜日  
(祝日・振替休日のときは開館し、その翌日を休館)  
年末年始、展示替え期間およびメンテナンス期間

〔開館時期〕  
1997 年 10 月 8 日

1997 年 10 月、二社一寺(東照宮・輪王寺・二荒山神社)を中心とした由緒ある文化財の集積地であり、世界遺産に隣接する日光市山内の地において、足下で大谷川と稲荷川が合流し、神橋の赤い欄干を望むことができる高台に、小杉放菴記念日光美術館は開館した。

小杉放菴記念日光美術館は「自然へのいづくしみ」を基本テーマとして、日光市名誉市民である画家・小杉放菴の画業を紹介するとともに、この画家を育んだ、近代の日光における、さまざまな文化的事象について考察することも目標としている。

「日光市立美術館」として、旧・日光市により建設され、開館の当初から「財団法人 小杉放菴記念日光美術館」が管理運営を受託しており、平成の市町村合併で、新しい日光市が誕生し、指定管理者制度が導入されたあとも引き続いて管理運営を代行しているが、2013 年 4 月 1 日、「財団法人 小杉放菴記念日光美術館」は、特例民法法人から移行認定され、「公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館」となった。

小杉放菴記念日光美術館では、主たるコレクションとして、明治・大正・昭和にかけて幅広い分野で活躍し、日本の近代美術史上に特異な存在感を示

した日光出身の画家・小杉放菴の素描画、油彩画、日本画、水彩画、書などの作品と、書簡や書籍、遺愛品など、関係する資料を所蔵している。

その他、開館以来、これまでに開催した企画展に合わせて収集された、小杉放菴に関する画家としての吉澤儀造や木村荘八の作品と資料、日光の社寺が描かれた明治 30 年代の水彩画、中村直人や斎藤博之の絵画作品や、栃木県内で江戸時代に形成された文人画の扇面コレクション、さらには、現代美術やアール・ブリュットの作品など、幅広い分野でのコレクションを充実させており、また、昨年度には、国立公園協会から「国立公園絵画」80 点が寄贈されて、所蔵作品となった。

館内には、ミュージアム・グッズを扱うショップや喫茶室(カフェ アン・レーヴ)を設置して利用者の方の便宜を図るとともに、エントランスホールを利用し、国内外の実力派アーティストを招いたミュージアム・コンサートや朗読会、地元劇団の公演などを継続的に実施して好評を博している。また、日光を訪れる林間学校の小学生を対象にした、夜間の絵画鑑賞教室をはじめ、市内の小中学校への移動展覧会など、教育普及の活動も精力的に行なっている。  
(田中正史・たなか まさふみ)

## アーツ前橋

〒 371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16



TEL: 027-230-1144  
FAX: 027-232-2016  
E-mail: bunka@city.maebashi.gunma.jp

〔開館時間〕  
午前 11 時から午後 7 時まで

〔休館日〕  
水曜日(祝祭日の場合は翌平日)

〔開館時期〕  
2013 年 10 月 26 日

アーツ前橋は芸術文化活動の支援や振興の担い手として、「創造的であること creative」、「みんなで共有すること share」、「対話的であること dialogues」の三つの活動理念を掲げ 2013 年 10 月に開館する。場所は JR 前橋駅から徒歩圏内の前橋市街地の中心に位置し、建築は全国公募の審査によって選ばれた建築家・水谷俊博により、「まちとつながる美術館」をコンセプトに、かつての商業施設(デパート)を美術館としてコンバージョンした建物である。白いパンチングメタルで覆われた建物外観を受けて、ブランディングデザイナー・西澤明洋により、「点と点をつなぐ線」をコンセプトにアーツ前橋のヴィジュアル・アイデンティティ(VI)がデザインされた。展示スペースは 1,444㎡、そのほかスタジオスペース、カフェ、アーカイブスペースを設けている。所蔵作品は地域ゆかりの作家を中心に山口薫、小室翠雲など約 850 点を所蔵。

美術館構想は 2008 年 10 月より市民による美術館構想に向けたワークショップ(全 8 回)などを経て美術館基本構想・基本計画が策定され、2010 年 11 月よりプレイベントを開始し、2012 年度まで 23 回にわたり多くの市民、アーティストとともにシンポジウムや市民向けワークショップ、街なかを使ったアー

トプロジェクトなど様々なイベントを開催した。この中で 2011 年に市内の施設を利用して収蔵作品展を開催したほか、アーティスト・イン・レジデンスとして照屋勇賢、ペ・ヨンファンを招聘、同年 7 月よりアートスクールを開設し様々な専門を持ったコーディネーターとともに、地域に根ざしたトビックスから美術の知見を深めてもらう講座など全 6 コースを実施した。

また開館に向け TokyoDex、山極満博、廣瀬智央らのコミッションワークが制作された。それぞれが、建築空間の特徴や地域とのつながりを活かす作品になっている。2013 年 3 月には市民組織「前橋文化推進会議」との共催により、アーツ前橋の内覧イベント「WALK あるくことからはじまること」を開催し、ダンサー、ミュージシャンから前橋近郊の幼児、小中学生まで、アーティストと市民総勢 130 人の多様な出演者によるパフォーマンスを実施した。

こうした展示事業以外の公演、トークイベント、スクール、あるいは学校と連携した教育普及事業に力を入れるほか、館外で展開する地域アートプロジェクトを実施することを活動の特徴としていく。新しい創造や対話の機会を生み出す企画をおこなうことで、地域に長く支援してもらえるような活動を目指している。  
(吉田成志・よしだなるし)



## 馬の博物館

〒 231-0853 横浜市中区根岸台 1-3 根岸競馬記念公苑



TEL: 045-662-8105  
FAX: 045-641-4604  
E-mail: matsumoto@bajibunka.jrao.ne.jp

[開館時間]  
午前 10 時から午後 4 時 30 分まで (入館は午後 4 時まで)

[休苑・休館]  
月曜日 (祝日・振替休日の場合は開館)  
年末年始 (12 月 28 日～1 月 4 日)  
館内整備のため特別展・企画展の前後は臨時休館在り

[開館時期]  
1977 年 10 月 2 日

馬の博物館は 1860 年代、横浜で始まった洋式競馬発祥を記念した根岸競馬記念公苑内に、1977 年日本中央競馬会により開設された。運営は (財) 馬事文化財団、現在は公益財団法人馬事文化財団が運営する。博物館にはポニーセンターを併設し、馬と人との交流によって育まれた文物を自然史・歴史・民俗・美術工芸・競馬のフィールドに分けて、収集・調査・研究・展示を行ってきた。馬の総合博物館として過去 36 年間、収集してきた収蔵資料は 15,000 点から成り、馬を題材とした絵画が約 923 点、重要美術品の久隅守景筆《賀茂競馬図屏風》、浮世絵では旧ゴンクールコレクションの葛飾北斎の刷り物《馬尽シリーズ》などがある。日本の近現代の画家では坂本繁二郎絶筆の《月光》、加藤栄三《馬》、山田申吾《夏野》の代表作を所有し、馬の彫刻家では池田勇八、伊藤国男、三井高義などの作品群がある。西洋美術では、ドラクロアの水彩画、ロートレック、ウォードの《名馬名鑑》、マネ、シャガール、ピカソの《真夜中の馬》シリーズなどのリトグラフがあり、ドガ、ボヌールの馬のブロンズ像なども所有している。

工芸品では、日本の馬具 173 件には重要文化財《張良図沈金鞍》、中川コレクションの刀装具・印籠 181 件、佐野コレクションの馬の根付 120 点なども収蔵する。また馬像や騎馬像が刻印されたギリシャ・

ローマの古代コインから近現代のコインまで約 338 点の中川コレクションもある。これまで行ってきた特別展、企画展の内、美術展では、馬の画家坂本繁二郎展、大英博物館秘蔵馬のコイン展、馬の西洋版画展、ウィーン美術史美術館の「西洋甲冑の美展」、馬の彫刻家として「池田勇八展」、「三井孝義展」などを開催した。また一昨年は北海道の農民画家として早逝した神田日勝展、昨年は現代アートで、ブルガリアの彫刻家ヴェルジィ・ラシドフの「ケンタウロス展」、東山魁夷の「白い馬のシリーズ展」などを開催した。今秋には新進画家の森部英司「馬に乗り・色が乗る展」、武蔵野美術大学とのコラボの馬の美術展の企画も予定している。

馬の博物館には屋外展示場としてポニーセンターがあり、サラブレッドやポニー、日本在来馬など、実際の馬を品種ごとに繋養している。来館者はその馬のいる風景を楽しみ、馬に触れる乗馬体験を通して、馬の息づかいや体温まで知ることができる。

馬の美術作品は、人類が永い間パートナーとして人と親密な関係にあったことを表わす証しでもあり、博物館では生きた教材である馬を通して、それぞれの作家の馬への想いを作品から汲み取れるような展示を試み、馬の果たしてきた役割と魅力を未来に伝えていきたい。(末崎真澄・すぎさきすみ)

## 実践女子学園香雪記念資料館

〒 191-8510 東京都日野市大坂上 4-1-1



TEL: 042-585-8873  
FAX: 042-589-7225  
E-mail: kosetsu@jissen.ac.jp

[開館時間]  
午前 11 時から午後 4 時まで

[休館日]  
土・日・祝日・大学休業期間  
(企画展開催期間以外は休館する場合があります)

[開館時期]  
2000 年 5 月 8 日

実践女子学園香雪記念資料館は、1967 年に実践女子大学に博物館学課程が開講したことにより計画され、当初、美術資料展示室がつくられた。1985 年、大学校地が日野に移転し、同時に文学部に美学美術史学科が開設されたのを機に、その展示室は「日本・東洋美術展示室」と名称を改め新校舎に設置された。ここでは美術史の研究に役立つ資料の収集と展示だけでなく、学芸員資格修得に必要な授業と実習も行われてきた。その後 1999 年、学園創立 100 周年記念事業の一環として建設された新校舎に「実践女子学園香雪記念資料館」が発足、博物館としての体裁を整え現在に至っている。館名の「香雪」は学祖下田歌子の号に由来するものである。2000 年度より、学園が所蔵する学祖の資料研究・展示をはじめ、資料収集方針のひとつでもある女性画家作品を中心とした所蔵品展、女性の文化活動を紹介する展示や学内の様々な専門分野に関係する展示を数多く開催してきた。また、学生、卒業生の作品展等の会場としても利用されている。後援会、ワークショップなど社会教育施設としての役割を踏まえた活動も行ってきた。2004 年 9 月には、それまでの博物館活動が認められ、東京

都教育委員会より博物館相当施設の指定を受けた。

現在、実践女子学園香雪記念資料館では二つの展示室、学芸員室、実習室、収蔵庫などを備え、1 年に 5 回ほどの企画展示を計画している。また、博物館学課程における博物館実習の受け入れ館としての役割も果たしている。2014 年度からは実践女子大学・短期大学の二校地化に伴い、渋谷キャンパス内に移転する予定である。近隣には博物館・美術館が数多くあり、文化活動の活発な地での新たな展開を目指していきたい。

また女性画家作品の収集・調査・研究の成果として、岡倉天心らが創刊した美術雑誌『國華』1397 号 (2012 年 3 月刊行) に本館所蔵品による女性画家特集号を編んで頂いた。下田歌子が創立して以来、長年女子教育に携わってきた実践女子学園付置の施設として、女性たちの社会活動や文化活動の歴史から学んだことを、今日そして未来の女性たちへ向けてのメッセージとして発信したい。また、在校生だけでなく、卒業生や市民の皆様からも気軽に利用していただける美術館・博物館に成長していきたいと、館員一同願っている。(広木春香・ひろきはるか)



## 軽井沢ニューアートミュージアム

〒 389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢 1151-5



TEL: 0267-46-8691  
FAX: 0267-46-8692  
E-mail: pr@knam.jp

〔開館時間〕  
夏期 午前 10 時から午後 6 時まで  
(入館は午後 5 時 30 分まで)  
冬期 午前 10 時から午後 5 時まで  
(入館は午後 4 時 30 分まで)

〔休館日〕  
火曜日(夏期:無休、冬期:火・水曜休館)

開館時期: 2012 年 4 月 27 日

軽井沢ニューアートミュージアムは、主に日本の戦後から現在までの優れた美術を新しい視点から再領域化し、国際的な評価にたえる諸作品を広く国内外に普及してゆくことを目的として開館した。

美術館の設計は建築家・西森陸雄によるものである。総ガラス張りをベースにカラマツ林をイメージし、白い柱をデザイン的に林立させた構造により、さわやかな高原リゾート地・軽井沢に心地よく溶け込ませている。

当館は、理念として次の二つを掲げている。1. 欧米のコンテンポラリーアートの概念から脱落している日本やアジアの優れたアートを「ニューアート」として再領域化し、世界に発信していく。2. ハンディキャップを持った方々、お年寄りや子どもたちにニューアートの素晴らしさを体験していただくために、無料招待を実施するなど、様々なボランティア活動を行う。

企画展では、世界の第一線で活躍している日本の現代アートの作家だけでなく、海外作家も含めて、物故現存を問わず扱っている。開館から、企画展によって、国内外の美術ファンの期待に応えられるような斬新な切り口の展示を展開していくことを目指してきた。開館記念展「軽井沢の風展」では、ここ半世紀あまりの現代美術の分野において、国内外で評価されてきた作家及び現在活躍中の作家に焦点を当て、これらを展望した。その他にも、浮世絵展

にて春画を中心的に取り上げる期間を設けたり、東京藝術大学デザイン科出身のアーティストの展覧会を開催したりと、日本のアートを新しい視点から取り上げることを目指してきた。

また、展覧会の企画とともに、近年国際的な評価が高まっている「具体美術協会」に所属した前衛作家たちの作品など、日本の前衛作家の作品を積極的にコレクションしていく方針である。

教育普及事業としては、学芸員によるギャラリートークやイベント・プログラムなど、美術館及び美術作品に親しんでいただけるような事業を展開している。また、地元商店街や学校との連携をすすめ、軽井沢全体としての文化的なにぎわいの創出を目指している。

軽井沢には美術館をはじめとして数多くの文化施設があるが、当館はそうした文化施設、団体の方々、地元の方々と協働し、軽井沢町を国際的な芸術文化の拠点としてさらなる繁栄へと導くことを目指している。また、上記の目的を実現するために「軽井沢国際芸術文化都市推進協議会」(KIAC)の後援を受け、地域と連携した様々な活動を展開している。

冬期休館する文化施設も多い中で年間の継続的な開館を行う、地元の方にも親しまれる美術館づくりなど、観光地としての軽井沢とは違った、新たな文化的価値をこの地に加えるような活動を、継続して行っていきたい。(竹内 唯・たけうち ゆい)

## 山ノ内町立 志賀高原ロマン美術館

〒 381-0401 長野県下高井郡山ノ内町平穏 1465



TEL: 0269-33-8855  
FAX: 0269-33-8825  
E-mail: roman@theia.ocn.ne.jp

〔開館時間〕  
午前 9 時から午後 5 時まで(入館は午後 4 時 30 分まで)

〔休館日〕  
木曜日

〔開館時期〕  
1997 年 10 月 4 日

山ノ内町立志賀高原ロマン美術館は、長野冬季オリンピック・パラリンピックの開催(1998 年)を記念して、1997 年 10 月 4 日に開館した。当館は、スキー発祥の地でもある志賀高原の豊かな自然の懷に抱かれ、ふんだんに湧き上がる温泉の地上林温泉のふもとに位置する。

志賀高原の山々のなかでひととき目をひく当館の建築は、日本を代表する世界的な建築家・黒川紀章氏の設計によるものである。建物は、美術館棟とレストラン棟の二つから成っている。美術館棟は、上面を完結した楕円形に即した形に設計されており、光の閉ざされた展示室の壁は一面暗い灰色で覆われ、鑑賞者を深淵の世界に誘うような、きわめて独自性の強い展示空間である。一方、レストラン棟はランドマークとなる印象的な透明ガラスの円錐形で構成されている。光が燦々と降り注ぐ空間と、棟内から見える四季折々の自然の表情は、黒川氏の提唱した「自然との共生」の理念がこの志賀高原の地に息づいていることを物語っている。

展覧会は年 4 回ほど、自主企画展と館の所蔵作

品展を中心に開催している。収蔵作品は、地元出身で南画家として名を馳せた児玉果亭(1841-1913)をはじめ、古代ローマ時代のローマン・グラスや現代ガラス作家による作品も数多く含む。

近年特に力を入れているのは、郷土に残された史料の調査と、当館の個性的な建物の特徴を活かした現代アートの展示である。数多くの文人墨客が訪れた当地には、未だ調査研究の対象となっていない数多くの史料が残されていると考えられる。古き新しきを問わない芸術・文化の在り方を図る必要性がある。

現代アートに関しては、長野県外の若手アーティストの活動に焦点を当てた展覧会を企画し、地域の方にアートをより身近な存在に感じていただくためのワークショップなどアーティストとの交流の場を設け、美術館を中心とする地元へ根ざした文化振興のかたちを探っている。今後も他館との交流を通して、地域そのものの活性化に寄与できる活動を模索していきたい。

(鈴木幸野・すずき ゆき)

## 高浜市やきものの里かわら美術館

〒444-1325 愛知県高浜市青木町 9-6-18



TEL:0566-52-3366  
FAX:0566-52-8100  
E-mail:info@takahama-kawara-museum.com

【開館時間】  
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

【休館日】  
月曜日（祝祭日の場合は翌平日）

【開館時期】  
1995 年 10 月 7 日

名古屋から電車で約 1 時間、西三河地方の衣浦湾に面した人口約 4 万 6 千人のまち愛知県高浜市。高浜市は生産量日本一を誇る三州瓦の中心地的産地として知られている。名鉄高浜港駅から鬼瓦やさまざまな種類の瓦が楽しめる散歩道の「鬼みち」を歩いて辿り着く当館は、隣の半田市に渡る衣浦大橋の袂に位置している。建築家内井昭蔵氏によって設計された建物は、かつて三州瓦を全国に運搬した千石船をイメージしてデザインされており、美術家関根伸夫氏によるモニュメントが設置された美術館前の「森前公園」は、海の風景をモチーフにしたものである。

当館は日本で唯一の瓦をテーマとした美術館として 1995 年に開館した。瓦を美術的に鑑賞するとともに、芸術文化活動を通して、人々の美意識や感性を刺激し、創造意欲を高め、生活の中に遊び心とうるおい、豊かさをもたらすことを目指している。

かわら美術館では、日本の各時代の瓦類をはじめ、世界の瓦類や、やきもの、瓦ややきものに関連した美術品（絵画、版画、浮世絵、書、写真など）を収集している。これらは常設展示として鑑賞できるほか、年に 4 回の企画展の中で紹介を行っている。瓦以外の所蔵美術作品としては、歌川広重の浮世絵「名所江戸百景」のうち 37 点、関野準一郎の版画「東海道五十三次」シリーズ、木村伊兵衛の写真「パリ」シリーズなどがある。

館蔵品を中心とした企画展のほか、同じく年に 4

回、絵本原画、やきものを中心としながら、平和やサブカルチャー、アール・ブリュットといったさまざまなテーマの特別展を展開し、芸術文化の発信に努めている。特徴的なものとして、1999 年から隔年で開催している「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」、過去最高来場者数を記録した 2006 年の「GUNDAM GENERATING FUTURES：来たるべき未来のために 高浜特別展」、2005 年に開催した「アウトサイダー・アート展～描かずにはいられない表現者たち～」と昨年 2012 年に開催した「アール・ブリュット・ジャポネ展」などがある。もちろん、瓦をテーマとした特別展も継続的に行っており、直近では東日本大震災の復興を祈念する思いを込めて「みちのくの瓦 東北と三州をつなぐもの」展を開催した。

当館は施設の開放も行っているが、中でも人気ののは 2 階の陶芸創作室である。開館日は毎日、午前と午後それぞれ半日の体験コースを開催しており、プロの陶芸家の指導のもと、誰でも気軽に皿や茶碗、湯のみといった食器類から、ランプシェードや置き物まで、さまざまな作品を作ることができる。このほか 1 階には瓦を焼く「だるま窯」の内部をイメージしたシアターがあり、高浜市や瓦に関する映像を見ることができる。

当館は今年で開館 17 年を迎える。今後も地域の親しみやすい美術館として、また市民交流の場として、そして子どもの学びのための開かれた施設として在り続けたい。（今泉岳大・いまいずみ たいけい）

## 文化フォーラム春日井

〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町 5-44



TEL:0568-85-6868  
FAX:0568-82-0213  
E-mail:bijutsu@kasugai-bunka.jp

【開館時間】  
午前 8 時 30 分から午後 9 時 30 分まで

【休館日】  
月曜日（祝日の場合その翌日）、年末年始

【開館時期】  
1999 年 11 月 11 日

文化フォーラム春日井は、文芸館と図書館からなる複合文化施設として 1999 年 11 月に開館した。中心市街地に位置し、JR 春日井駅からバスで 5 分程度、市役所や市民会館と同じ敷地内にある。参加・体験・創造の拠点となる文芸館では、独創的な展示空間を演出できるギャラリー、開放感あふれる交流アトリウムのほか、視聴覚ホールや日本自分史センターなどを備え、文化創造への様々な可能性のある施設となっている。

開館翌年に設立されたかすがい市民文化財団が、文化事業の企画・実施や、中核文化施設の運営を行うことにより、市民の自主的・主体的な文化活動を支援し、魅力ある市民文化の創造を目的として運営にあたっている。

ギャラリーでは、年間 2 ～ 4 回程度の企画展を開催している。良質な鑑賞機会を市民に提供するもの、参加型展覧会や現代アートで新しい価値観を提示するもの、絵本作家展や人形展など市民ニーズに応えたものなどそのテーマは幅広く、展覧会と同時に、充実した普及プログラムを展開するアートセンター型の活動を行っている。とりわけ、ワークショップ、アウトリーチ、オリジナルの教育アニメーション制作等、企画力を活かした独自の内容には、

近隣施設の学芸員から「春日井のプログラムは常にチェックしている」という声も届く。コレクションとしては、郷土の作家を中心に日本画・洋画をはじめ、平安時代の三跡の一人・小野道風の生誕の地と伝えられ「書のまち」として書道文化を推進していることから、数多くの書作品も収蔵している。

一方、当館では貸館も重要な文化振興と位置付け、企画展以外の時期には、本格的な展示空間を使って市民が日頃の創造の成果を発表している。

市役所をはじめ、商工会議所やボランティア拠点施設とも至近距離にある立地を活かし、関係諸機関と様々な分野で情報交換や協力関係を築き、飲食店とのコラボメニュー、商店街とのスタンプラリーなど、地域連携にも積極的に取り組んでいる。また、「文化の主体はあくまで一人ひとりの市民」という考えの元、市民が持つ高い専門性を見出して活躍の機会を作り、文化芸術を通した仲間づくりを心がけている。

近年力をいれているのは、他館と連携した企画である。これまで、小規模館の人的・資金的制約から、質の高い展覧会の開催が難しい面があったが、全国美術館会議に加盟することで、良質な企画を市民に提供できるようになることを期待している。

（鳥羽都子・とばみやこ）



NO. 9

## ヤマザキマザック美術館

〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵 1-19-30



TEL:052-937-3737  
FAX:052-937-3789  
ホームページ: <http://www.mazak-art.com/>

【開館時間】  
午前 10 時から午後 5 時まで (入館は午後 4 時 30 分まで)

【休館日】  
月曜日 (祝日の場合その翌日)、年末年始、  
展覧会準備期間

【開館時期】  
2010 年 4 月 22 日

当館は、工作機械メーカーヤマザキマザック株式会社社長、故・山崎照幸 (1928-2011) が 40 年近くにわたって収集した美術コレクションを収蔵・展示するための施設として建設され、2010 年 4 月 22 日に開館した。名古屋市の中心部のオフィス街に位置し、地下鉄東山線新栄町駅から美術館へと地下でつながっている。周囲には、愛知県美術館をはじめ名古屋市美術館、名古屋ポストン美術館、徳川美術館など美術館施設が数多い。

地下 2 階、地上 5 階建の建物は、1 階に受付、チケット売り場、ミュージアムショップ、2 階に事務室、3 階が収蔵庫、4、5 階が展示室となっている。収蔵庫と展示室がある 3 階から 5 階は免震構造となっており、4 階の展示室面積は 517.27㎡、5 階の展示室面積は 509.92㎡である。展示室は、部屋ごとに異なる色柄の壁紙やシャンデリアなど、18 世紀の貴族の邸宅を彷彿とさせる内装が特徴的である。

収蔵作品は、ヴァトー、プーシェ、フラゴナールといった 18 世紀ロココ絵画から、印象派、野獸派、エコール・ド・パリを経て、ピカソにいたるまで、フランス絵画 300 年の歴史をたどることのできる絵画コレクション及びエミール・ガレ、ドームをはじめとするアール・ヌーヴォー様式のガラス工芸、家具など、現在約 300 点である。常設展示のみの期間は 5 階

に絵画のコレクションが、4 階にガラス工芸と家具のコレクションが展示されている。

企画展覧会は、当館の収蔵品と関連性のあるテーマの展覧会と、現代の若手作家を紹介する展覧会に分かれ、年に 2～3 回開催。それぞれ、ガイドツアー、ワークショップ、外部講師を招いての講演会、特別ギャラリートークなど、各種関連イベントを展開している。開館 1 周年に当たる 2011 年は、当館所蔵のロココ絵画と共にロココ時代のファッションやインテリア、風俗を紹介する「ロココの雅展」、開館 2 周年に当たる 2012 年は、アール・ヌーヴォーの宝飾品にも生かされているエマイユ (七宝) の魅力を紹介する「エマイユの煌き展」を開催した。開館 3 周年に当たる本年は、4 月 27 日～7 月 15 日にバルビゾン派を中心にフランス風景画の流れをたどる「フランスの美しい風景展」を開催。7 月 19 日～9 月 29 日には自然のモチーフを様々な素材や手法をもちいて表現した現代作家の作品を紹介する「夏の思い出、森の夢展」を開催している。当館のコレクションを楽しんで頂くのはもとより、当館のコレクションや展示室の特徴を生かした企画展示をより多くのみなさまに楽しんで頂けるようさらなる努力をしたい。

(吉村有子・よしむら ゆうこ)

NO. 10

## 九州国立博物館

〒818-0118 福岡県太宰府市石坂 4-7-2



TEL:092-918-2807  
FAX:092-918-2810  
E-mail: [soumu-kakari@kyuhaku.jp](mailto:soumu-kakari@kyuhaku.jp)

【開館時間】  
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで  
(入館は午後 4 時 30 分まで)

休館日: 月曜日・年末  
(月曜日が祝日・振替休日の場合は翌日)

開館時期: 2005 年 10 月 16 日

九州国立博物館は、日本文化の形成をアジア史的観点から捉える国立博物館として福岡県太宰府市に 2005 年 10 月 16 日に開館した。ここ福岡県太宰府市への誘致・設立にあたっては、地元住民の熱心な応援が決め手となった。当館の大きな特色の一つは、国 (独立行政法人) と福岡県が連携協力して事業運営をしていることである。

展示については、文化交流展示室 (床面積約 4,000 ㎡) は、5 つの基本展示室とそれを取り巻く 11 の関連展示室から構成されている。そこでの基本のテーマは「海の道、アジアの路」とし、日本とアジア諸国との文化交流のありさまをわかりやすく示すための資料 (美術・考古・歴史及び民族資料等) を展示し、また収集もしている。年 100 回におよぶ展示替えと、特定のテーマを取り上げた「トピック展示」を年数回以上行ないながらいつも新鮮な展示が提供できるように心掛けている。特別展は、年間 4 回開催しており、いろいろなテーマを多様な切り口で紹介するもので、初めての方も楽しめる、よく知っている人でも楽しめる、そんな展覧会を目指した企画である。今年 4 月に日本初「大ベトナム展」(4 月 16 日～6 月 9 日) を開催し、東南アジアの国の文化を紹介しているのも、九州のこの地ならではの試みと自負している。

博物館の大きな役割である文化財を保存・管理する「収蔵庫」は、建物の中心に位置しており、直接外部と接しないように空気層を設けた二重構造

(魔法びん構造) になっている。また、空調設備は、恒温恒湿仕様の空調機を採用することにより、庫内温湿度を維持している。壁、天井には九州産の杉を、床には北海道産のブナを使用することにより空調のみに頼らない温湿度の保持を図っている。また、この収蔵庫の内部をみることのできるバックヤードツアーをボランティアが案内してくれるのも大きな魅力のひとつである。

教育普及活動については、「学校より面白く、教科書よりわかり易い」をコンセプトに、五感で体験できる展示室「あじっば」(常設・無料) がある。また博物館のコンテンツをベースに開発した学習支援ツール「きゅうぱっく」は、学校の授業などへ提供している。

博物館の特長としては、館の主体部分には免震装置を設け、危機管理への対応に大きな関心を向けていることである。このことは人にとっても、文化財にとっても安心安全の環境づくりであり、これに加えて博物館の諸活動に博物館科学 (保存科学) を導入することによってより正確に達成できるように努めている。

そして面白くなければ博物館じゃないと一年中多彩な催しを実施しており、一例としては「博多祇園山笠の飾り山笠の展示」、「太宰府古都の光」、「留学生 茶道体験」、「人形浄瑠璃」、「九博士どもフェスタ」など展示のほかにも博物館を楽しむことができる。「面白くなければ博物館じゃない!」を味わいには是非お試しください。(大石淳子・おおいし じゅんこ)



## 平成 25 年度第 1 回理事会及び第 62 回総会について

5 月 30・31 日、栃木県宇都宮市において宇都宮美術館及び栃木県立美術館の 2 館を担当館として開催された平成 25 年度第 1 回理事会及び第 62 回総会についてご報告します。

30 日午前に開かれた理事会では、平成 24 年度事業及び収支決算、平成 25 年度事業計画案及び収支予算案、新規入会館・賛助会員の審査及び退会館の報告、役員任期の満了に伴う役員候補者の選任、企画委員の交代が審議されました。続いて、東日本大震災復興対策事業の支援事業 1 件についての審議が行われ、採択されました。

また、日本博物館協会の「福島県警戒区域の再興を担う博物館の復興・再生に向けて（提言）」の賛同及び協力、機関誌『ZENBI』への広告掲載と一般への販売についての検討が行われました。

同日午後、宇都宮東武ホテルグランデ「松柏」で、栃木県知事及び宇都宮市長の歓迎挨拶、文化庁長官の祝辞の後、会員館 162 館の出席により総会が開催されました。議事に入り午前中の理事会の審議を経た平成 24 年度事業報告・収支決算、平成 25 年度事業計画案・収支予算案と平成 24 年度第 2 回理事会での審議を含めた新入会館が承認されました。

九州国立博物館、高浜市やきものの里かわら美術館、馬の博物館、ヤマザキマザック美術館、軽井沢ニューアートミュージアム、山ノ内町立志賀高原ロマン美術館、小杉放菴記念日光美術館、実践女子学園香雪記念資料館、文化フォーラム春日井、アーツ前橋の 10 館が新たに入会し、5 月末現在の会員館数は 367 館となりました。

また、今年度は 2 年に一度の役員の改選期となるため、理事会から提出された役員候補者について審議、選任されました。

その後、新役員による臨時理事会が開催され、会長に埼玉県立近代美術館の建昌哲館長が選任され、副会長に徳川美術館の徳川義崇館長、国立国際美術館の山梨俊夫館長、長崎県美術館の米田耕司館長が指名されました。また、大原美術館の高階秀爾館長の企画委員長としての退任に伴い、富山県立近代美術館の雪山行二館長が選出され、企画委員の山脇佐江子情報・資料研究部会長及び島崎丞小規模館研究部会長の退任により、新たに企画委員として、広島県立美術館の越智裕二郎館

長が情報・資料研究部会長、笠岡市立竹喬美術館の上園四郎館長が小規模館研究部会長に就任されました。規約では、事務局は原則として会長が所属する美術館内に置くこととされておりますが、理事会での協議の結果、引き続き、国立西洋美術館内に事務局を置くことと併せて総会で報告いたしました。

その後の報告第 1 号として、企画委員会の活動報告があり、各研究部会から平成 24 年度の活動と平成 25 年度の計画について発表が行われました。報告第 2 号で東日本大震災復興対策委員会の活動についての報告及び東日本大震災救援・支援対策本部に置かれた美術館・博物館総合調査分科会と文化財レスキュー事業記録集分科会の目的や今後の活動についての報告を行いました。

総会後の特別セッション「復興への取組のなかで―全米による支援事業の意義と課題―」では、東日本大震災復興対策委員長の山梨俊夫国立国際美術館長の挨拶の後、岩手県立美術館の大野正勝学芸普及課長から「アートのチカラ展」、リラス・アーク美術館の山内宏泰学芸係長から美術館の全面再開と津波に関する常設展示、宮城県美術館の三上満良学芸部長から元気キャラバンと高橋英吉展、福島県立美術館の伊藤匡学芸課長から放射線測定と福島県美術館連絡会議、東京都写真美術館の三井圭司学芸員から陸前高田被災資料デジタル化プロジェクト等の活動報告が行われました。引き続き、東日本大震災復興対策副委員長の村田眞宏愛知県美術館長の司会により、活動報告を行った 5 名とのディスカッションが行われ、復興に向けた活動の成果と課題を供することができたと感じています。全国美術館が今後さらに力を合わせて震災からの復興に取り組んでいけるようにご協力をお願いします。

総会 2 日目の 5 月 31 日は、担当館をお願いした宇都宮美術館と栃木県立美術館の施設視察と展覧会見学を行いました。総会の準備と実施にご尽力をいただきました宇都宮美術館と栃木県立美術館の皆様、あらためてお礼申し上げます。

また、第 63 回総会は広島県立美術館を担当館として、来年 5 月 22・23 日に広島市で開催されますので、今年と同様に多くの会員館の参加により、年に一度の総会が有意義なものとなるようよろしくお願いします。

生島達久（おじま たつひさ・国立西洋美術館）

『ZENBI』の第 4 号をお届けする。この春の総会で青柳正規会長が退任され、建昌哲埼玉県立近代美術館館長が全国美術館会議の新しい会長に選任された。青柳前会長は美術品国家補償制度の設立や東日本大震災への対応といった重要で困難な仕事に大きな成果を残していただいた。本誌の創刊も青柳前会長の任期中の出来事であった。あわせて高階秀爾大原美術館館長も研究部会を統括する企画委員会の委員長を今期で退任され、雪山行二富山県立近代美術館館長が後任として選任された。お二人には次号で任期を終えての所感と今後の抱負についてお言葉をいただくつもりである。今年は全国美術館会議にとって区切りとなる出来事が続いた。本誌は今後も新しい体制の下で活動の一端を担っていきたい。

今年も総会後の特別セッションにおいて震災と復興に関わるテーマが扱われた。震災に関係するセッ

ションが 3 年連続で組まれたこととなり、3.11 が美術館に大きな影響を与えたかを暗示している。そしてその一方、震災の被害と原子力災害の影響は今なお現地に大きな爪痕を残していることが報告からもうかがえた。震災と放射能の問題は本誌でも引き続き取り上げる予定である。

今号では情報・資料研究部会の協力を得て、フォーラムに作品情報や文献の管理の問題に関わる論文を収めた。前号に引き続き、美術館倫理規定に関する投稿も寄せられているが、分量の関係で次号に回すこととした。前号で予告した本誌の一般販売についてはまだしばらく調整を続けることとする。なお、本誌は全国美術館会議のホームページでも公開されており、最新号を除いて、全ての内容をインターネット経由で閲覧することができるようになった。ホームページ部会の協力に感謝したい。（O）

## 『ZENBI』では、次の要領で広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

## [原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付けてください。

## [投稿の資格]

- ・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

## [投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

## [締切]

- ・第 5 号（平成 26 年 1 月発行予定）に関しては 10 月 31 日、第 6 号（平成 26 年 7 月発行予定）については 4 月 30 日を締切とします。（当日必着）

## [提出先]

メールの場合

matuyama@ma7.momak.go.jp

郵送の場合

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町  
京都国立近代美術館内 全国美術館会議機関誌部会  
幹事 松山利光

## [問い合わせ先]

内容に関する問い合わせは下記に御連絡ください。

〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内  
全国美術館会議機関誌部会  
幹事 尾崎信一郎 E-mail: s-osaki@pref.tottori.jp

## ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
  - (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
  - (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
  - (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
  - (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。
2. 投稿文の採否
  - (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
  - (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。
3. 原稿について
  - (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
  - (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
  - (3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
  - (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いがが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。
4. 校正について
 

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。
5. 著作権について
  - (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
  - (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。
6. その他
  - (1) 原稿料は支払わない。
  - (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。